



2007 年後期

東北大学会計大学院アンケート実施報告書

Tohoku University Accounting School

東北大学会計大学院ワークショップ委員会

1. はじめに

東北大学会計大学院は2005年4月に国立大学法人では初めての会計専門職大学院として開設され、本年3月で3年が経過し、これまでに71名の修了生を社会に送り出してきた。また、2007年度は本大学院の修了生が公認会計士試験を始めて受験し、多くの者が職業会計人としての一步を踏み出した年でもある。

本大学院の設立趣旨は、グローバルな視野と高度な分析能力をもつ職業会計人を養成し、有能な人材を将来にわたり社会へ提供し続けていくことである。本大学院での教育は、公認会計士の資格を取得することが最終的な目標ではなく、会計士として、あるいは企業、官庁などの会計分野のエキスパートとして活躍できる知識と素養、および高い倫理観を体得することである。そのため、我々は社会が職業会計人に求める能力を把握し、これを学生への教育に反映し、同時に、現在行っている教育が学生の能力やニーズに見合っているかを確認しながら、より効果的な教育方法を模索し、常に本大学院での教育サービスの改善に努力する必要がある。その一環として、我々は毎 Semester 終了後に講義内容に関するアンケートを実施してきた。

過去3年間のアンケートについては、「アンケート実施報告書」として本会計大学院のホームページ (<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~tuasad/keiji2008a.html>) で公開している。その意図は、東北大学会計大学院への入学希望者や、将来において本大学院の修了生を受け入れて頂く監査法人、会計事務所、企業、官庁の方々に、本会計大学院でどのような教育が行われているかを理解して頂きたいという点にある。我々教員は、この調査報告書の公開により、東北大学会計大学院に対する社会の関心が高まり、本大学院出身の学生が高度な分析能力をもつ職業会計人として活躍できる機会が増えることを期待している。我々は、このアンケート調査報告書を在学生在が教員に対して発信したメッセージと捉え、改善すべき点を見出し、質の高い教育サービスを提供できるよう努力していきたいと考えている。本アンケート結果について、御意見等を頂ければ幸いである。

2008年6月12日

東北大学会計大学院ワークショップ委員会

2. 実施方法

本報告書の対象となるアンケートは、平成20年1月15日より受講者に配布・実施された。アンケートの種類は以下に示す通りである。

①「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」(巻末資料1)

②「会計大学院の授業に関するアンケート」(巻末資料2)

両アンケートともに無記名であり、①は1学生につき1回限りの回答とした。②は履修者が5名以上である全ての講義について実施し(講義担当教員の希望があったものについては、履修者が5名未満の場合でも実施)、学生は受講している講義毎に回答を行っている。

本報告では、最初に①のアンケートの集計結果から、本会計大学院の教育システム全般に関する分析を行い、問題点を明らかにし、今後の対応について述べる。次に、②のアンケート結果を集計し、今semesterに開講された科目について、その教育内容・教育方法全般に関する分析を行い、その問題点を明らかにし、今後の対応を検討する。

本報告では、アンケートにより得られたデータを可能な限り数量的・客観的に分析したいと考えている。そこで、①における自由記入欄の内容については、次年度以降にカリキュラム編成を行う際の参考とし、重要と考えられる意見に対してのみ若干のコメントを行いたい。また、②における科目毎のアンケートの集計結果(設問17と18の自由記入を含む)は、次年度以降の講義の参考となるよう、担当教員に直接報告している。

3. 「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」の集計結果について

3.1. アンケートの実施状況

「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」はこれまで前期、後期ともに実施していたが、カリキュラムが Semester 毎に変化する訳ではなく、前後期ともに実施することに大きな意味を見出せないため、2007 年度からは後期にのみ実施することとした。

本アンケート用紙は 2007 年度後期に開講された科目のうち、多数の会計大学院学生が履修している「監査制度」(34 名)と「上級監査制度」(31 名)において配布・回答・回収され、これらの科目を履修していない学生については事務分室で配布・回収を行った。回収数は 61、会計大学院の在籍学生 80 名に対して 76% という高い回収率となっており、本会計大学院に対する学生の意見が強く反映された集計結果になっていると思われる。

3.2. 設問ごとの集計結果と所見

以下では、それぞれの設問について開学当初からの集計結果を示し、2007 年度集計結果の所見と今後の対応について述べる。なお、全項目の集計結果については巻末資料 3 を参照されたい。

設問 1 は受講者属性を問うものであり、本アンケート回答者の 95% が会計大学院学生であった。したがって、本アンケート結果は当会計大学院学生のカリキュラムに対する率直な声を反映しているものと考えられる。

質問項目 2：基礎、展開、実践・応用の科目配置は適切だと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
適切である	6.67%	11.11%	42.86%	42.00%	32.79%
ほぼ適切である	40.00%	11.11%	28.57%	36.00%	34.43%
どちらともいえない	20.00%	44.44%	14.29%	16.00%	14.75%
やや不適切である	13.33%	0.00%	14.29%	2.00%	11.48%
不適切である	20.00%	33.33%	0.00%	4.00%	6.56%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	50	61

分析と所見

「やや不適切である」、「不適切である」の合計は、2006 年度に一度縮小したものの、2007 年度では 18% となっている。時間割の科目配置等の理由で、基礎、展開、実践・応用科目をバランスよく履修することが難しいと感じた学生が増加したと考えられる。

今後の対応

今回のアンケートは年度末に実施されたものであり、2007 年 10 月入学の学生を除き、全回答者が本会計大学院の講義を 2 セメスター以上受講している。またこれまでと同様に、科目分類(基礎、展開、実践・応用)を示す資料をアンケートに添付し、アンケート用紙の中でも科目分類に関する説明を行った。このため、今回得られた結果は、本会計大学院のカリキュラム(基礎、展開、実践・応用の科目配置)に対する学生の評価を示しているものと解釈できる。結果としては、前年度と同じく、ある程度満足のゆくものであったが、「やや不適切である」、「不適切である」の合計が増加に転じたことは、科目配置について新たな工夫が必要とされていることを示しているのかもしれない。今後とも、より多くの学生が満足できるようなカリキュラムを考えていきたい。

質問項目 3：セメスター間の開設授業科目のバランスは適切だと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
適切である	6.67%	0.00%	42.86%	28.00%	16.67%
ほぼ適切である	13.33%	33.33%	14.29%	20.00%	25.00%
どちらともいえない	13.33%	11.11%	0.00%	22.00%	26.67%
やや不適切である	26.67%	33.33%	42.86%	24.00%	18.33%
不適切である	40.00%	22.22%	0.00%	6.00%	13.33%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	50	60

分析と所見

「やや不適切である」、「不適切である」の合計は、2005 年度から 2006 年度へと 3 割程度に減少、2007 年度も 3 割である。一方で、「不適切である」が 2006 年度の 6% から 13% へと倍増している。セメスター間のバランスに強い不満をもっている学生が増えたと考えられる。

今後の対応

上記の結果は、開設 1 年目に比べれば、セメスター間の科目バランスに大きな不満をもつ学生の割合が減少し、現在の水準に落ち着いたことを示している。これは、2006 年度に行った簿記の開講時期変更による改善が、今年度も効果をもっていたと解釈できるかもしれないが、依然として 3 割程度の学生が不満をもっていることに変わりはない。この原因については個人面談等を通じて調査し、改善に向けて更なる努力を行っていききたい。

質問項目 4：オフィスアワーを利用して教員に履修相談・質問等を行った回数は。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
5 回以上	13.33%	33.33%	14.29%	6.12%	9.84%
4 回または 3 回	6.67%	11.11%	14.29%	14.29%	13.11%
2 回	33.33%	11.11%	42.86%	16.33%	26.23%
1 回	26.67%	22.22%	0.00%	14.29%	16.39%
利用しなかった	20.00%	22.22%	28.57%	48.98%	34.43%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	49	61

分析と所見

これまでの傾向として、頻繁に利用する学生とまったく利用しない学生の二極分化が観察されていた。2007 年度では、この二極分化の傾向は緩和されたものの、依然として 3 分の 1 の学生が「利用しなかった」と回答している。これまでと同じく、「利用しなかった」と答えた学生が多いのは、講義終了後に質問を済ませてしまうことが多いからと考えられる。このことを考えれば、オフィスアワーの役割を拡大する方向で考え直すことも必要かもしれない。本会計大学院には実務家教員も多く在籍するため、講義とは直接関係なくとも、実務に関する質問をしたい、話を聞きたいと思っている学生は多いかもしれない。

今後の対応

これまでの調査から、講義終了後などに質問を行っているため、特にオフィスアワーを利用する機会が無いということが分かっている。講義終了後に行われる質問は、ほとんどが講義内容に直接関係のあるものであることが考えられる。本会計大学院には、研究者も実務家教員も在籍している。講義中に扱われないことについて、学生たちが教員の話聞いてみたいと思っていることがあるかもしれない。このような潜在的な需要を調査し、これを満たしていくことも、今後模索していくべきかもしれない。

質問項目 5： Semester 開始時に行われる履修指導は、学習計画を立てる上で役に立ちましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
役に立った	0.00%	11.11%	14.29%	18.00%	38.33%
まあまあ役に立った	13.33%	22.22%	14.29%	32.00%	23.33%
どちらともいえない	20.00%	11.11%	0.00%	18.00%	15.00%
あまり役に立たなかった	40.00%	22.22%	14.29%	14.00%	10.00%
役に立たなかった	26.67%	33.33%	57.14%	18.00%	13.33%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	50	60

分析と所見

「役に立った」と「まあまあ役に立った」の合計が 6 割を超えた。前者に関しては 2006 年度に引き続き大幅な改善となっている。会計大学院設立から 3 年が経過し、教員が学生の要望についてより深く把握していること、マニュアルが整備され、履修相談においてより適切に指導がなされるようになってきていることが伺える。

今後の対応

「役に立った」と「まあまあ役に立った」の合計ポイントが増加し、「あまり役に立たなかった」と「役に立たなかった」の合計ポイントが減少するというこれまでの傾向は、今回のアンケート結果でも引き続き観察された。ポジティブな回答の合計が 6 割を超えたということは、一定の評価をしてよいだろう。ネガティブな回答は依然として 2 割以上あるが、それは、「結果的に特に必要なかった」ことを表しているのか、「そもそも行う意味がない」という感想を反映しているのかは分からない。2008 年度より、履修相談を個人面談と改称し、より幅広い相談を行うことにした。今後とも、学生が何を求めているのかを調査し、より多くの学生が満足できる肌理の細かい対応を行えるよう努力していきたい。

質問項目 6： GPA によって学生の能力は適切に評価できると思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
適切である	0.00%	0.00%	0.00%	14.00%	18.03%
ほぼ適切である	13.33%	33.33%	0.00%	16.00%	24.59%
どちらともいえない	46.67%	55.56%	71.43%	38.00%	29.51%
やや不適切である	0.00%	0.00%	0.00%	16.00%	16.39%
不適切である	40.00%	11.11%	28.57%	16.00%	11.48%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	50	61

分析と所見

「適切である」と「ほぼ適切である」の合計が 43% と過去最高になっており、GPA による成績評価はこれまでよりも受け入れられるようになってきたことが分かる。一方で、「やや不適切である」と「不適切である」の合計が依然として 27% あり、2006 年度後期の 32% とあまり変わっていない。「やや不適切である」と「不適切である」の合計があまり改善されていないことから、GPA による成績評価に疑問を感じる学生が減っていないと考えられる。その一方で、「適切である」と「ほぼ適切である」の合計が増加しているのは、GPA の利用が全国的に広まっている中で、もともと GPA に抵抗の無い学生が増えたことも一因として挙げられるかもしれない。

今後の対応

以前から強調し続けていることだが、GPAが単なる成績評価システムではなく、成績の自己管理のためのシステムであるという点を学生に理解してもらうことが肝心である。今後とも、個人面談等を通じて、この点を学生に理解してもらえるよう努力する必要がある。

GPAが学生に受け入れられるには、成績評価が公明正大に行われることが必要であろう。これは会計大学院設立当初から強く意識してきたことの一つで、学生に対してもオリエンテーションの場で毎年説明しており、成績評価方法について問題が生じたことはない。一方で、学生が自己管理を行うにあたって、科目毎の成績が一律に能力や学習の効果を反映しているのかという疑問があるかもしれない。引き続き適切な成績評価が行えるよう、成績評価基準を改善する努力を行っていく必要がある。

質問項目7：受験のための自主学習には1日平均何時間くらいかけていますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
5時間以上	33.33%	11.11%	0.00%	32.65%	35.00%
4-5時間	0.00%	0.00%	0.00%	16.33%	20.00%
3-4時間	26.67%	0.00%	0.00%	8.16%	16.67%
1-3時間	33.33%	44.44%	57.14%	28.57%	15.00%
していない	6.67%	44.44%	42.86%	14.29%	13.33%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	49	60

分析と所見

「3-4時間」、「4-5時間」、「5時間以上」と答えた学生の割合が、すべて2006年度よりも増えている。4時間以上と回答した割合については、2005年度から2006年度にかけて大きく増えていた。この傾向が今年度も続いたことになる。会計大学院は設立されたばかりで、「このくらい勉強しておけば良いだろう（良いようだ）」というように、良くも悪くも前年度の学生動向によって在学生在が振る舞いを変えているとも考えられる。

今後の対応

2006年度後期のアンケート結果において、受験勉強に掛ける時間の大幅な増加を憂慮すべき事態であると指摘したが、この傾向は今回も続いている。これは、会計大学院と公認会計士試験制度の制度に対する、学生たちの率直な反応であろう。この傾向が一時的なものであるという根拠は見つからず、今後も続いていくことが予想される。今後とも、個人面談等を通じて情報を収集し、会計大学院の在り方を探っていきたい。

質問項目8：e-mail、HPを用いた連絡システムは役に立ちましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
役に立った	40.00%	55.56%	71.43%	62.50%	56.67%
まあまあ役に立った	46.67%	22.22%	28.57%	33.33%	23.33%
どちらともいえない	0.00%	11.11%	0.00%	2.08%	15.00%
あまり役に立たなかった	13.33%	11.11%	0.00%	2.08%	1.67%
役に立たなかった	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	3.33%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	48	60

分析と所見

「役に立った」、「まあまあ役に立った」と答えた学生の割合は2006年度より減少してはいるものの、全体的な傾向は変わっていないと考えられる。これまでと同様に、e-mailとHPによる連絡システムの運用は高く評価されていると考えられる。

今後の対応

当会計大学院では、公認会計士試験等に関する情報を HP へ掲示するようにしている。今後とも、講義に関する連絡事項や資料等に加え、学生にとって必要で、また、学生が関心を持つ情報を、掲示等により随時学生に提供するよう努めていきたい。

質問項目 9：在学中の受験を考えていますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007
考えている	66.67%	55.56%	42.86%	72.92%	67.24%
まだ決めていない	13.33%	11.11%	0.00%	4.17%	6.90%
考えていない	20.00%	33.33%	57.14%	22.92%	25.86%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	15	9	7	48	58

分析と所見

2006 年度後期から減少しているものの、3 分の 2 の学生が在学中の受験を考えている。「まだ決めていない」と答えた学生は 7% であり、過去と同様に低水準である。2006 年度のアンケート結果と併せると、今年度は 7 割程度の在学生在が受験するようである。

今後の対応

前の設問結果からも分かるように、在学中の受験のために相当な時間を受験勉強に割いている学生が多数存在するようである。本来、会計大学院の学生は課程修了後の受験が想定されており、それを受けて短答式試験の科目免除が用意され、カリキュラムもこれを意図して組まれている。会計大学院としては、引き続き世界に通用する高度な分析能力をもつ職業会計人を育成するという、本来の趣旨に沿った教育を目指していくつもりである。しかしながら、会計士試験の合格者をできるだけ多く輩出することが望ましいのも事実である。今後の対応を考えていきたい。

質問項目 10：OB 会について

集計結果

選択項目	2007
賛成	51.72%
反対	6.90%
分からない	41.38%
計	100%
総数	58

分析と所見

この設問は今回から新しく追加されたものである。賛成が半数を上回った一方で、「分からない」と回答した学生が多いのは、OB 会がどのようなものになるのか、どのようなことを要求するのかによって、OB 会に対する態度が変わるからであろうと思われる。現時点で「反対」は 7% と少ないので、全体的に強く反対する理由はないと考えられる。

今後の対応

OB 会というものは、将来入学を検討している人にとって判断材料の一つになり得る。その意味では、魅力的な OB 会を作るということは、会計大学院にとって好ましい結果をもたらすことになるかもしれない。優秀な人材を集めるため、そして OB の交流や情報交換の場として OB 会は位置付けることができるだろう。今回の結果を踏まえ、OB 会創設を検討していきたい。

3.3. 自己評価と今後の課題

ここでは、設問2から10の分析結果を基に問題点を明らかにし、今後の対応について述べる。

設問2(基礎, 展開, 実践・応用の科目配置)については、前回と同様に、アンケート時に「基礎」・「展開」・「実践・応用」の科目分類表を配布し、これを見ながらアンケートに回答してもらった。2005年度後期から2006年度後期にかけては改善したものの、今回のアンケートでは悪化した。今回も科目分類を理解した上での回答なので、より深く設問の意図を理解した上での結果であると考えられる。この結果を受け、個人面談等の機会にどのような不満を感じているのかを調査し、改善を図っていきたい。

設問3(セメスター間の開設授業科目のバランス)については、開設1年目に比べれば、セメスター間の科目バランスに大きな不満を持つ学生の割合が減少し、現在の水準に落ち着いたことを示している。これは、2006年度に行った簿記の開講時期変更による改善が、今年度も効果をもっていたと解釈できるかも知れないが、不満をもっている学生の割合に変化がないことを考えれば、更なる改善努力が必要であろう。

設問4(オフィスアワー)については、これまで観察されていた、頻繁に利用する学生、とまったく利用しない学生の二極化の傾向が、2007年度では緩和されたものの、依然として3分の1の学生が「利用しなかった」と回答している。講義終了後に質問を済ませてしまうことが多いからと考えられる。講義終了後に行われる質問は、ほとんどが講義内容に直接関係のあるものであろうことが考えられる。本会計大学院には、研究者も実務家教員も在籍している。講義で扱われないことについて、学生たちが教員の話聞いてみたいと思っていることがあるかも知れない。会計大学院における教育を充実させるためには、こうした潜在的な需要を満たしていくことも、今後模索していく必要があるかもしれない。

設問5(履修指導)については、過去のアンケートにおいて、「役に立った」と「まあまあ役に立った」の合計ポイントが増加し、「余り役に立たなかった」と「役に立たなかった」の合計ポイントが減少するという傾向があった。今回のアンケート結果でも引き続き観察された。会計大学院設立から3年が経過し、教員が学生の要望についてより深く把握していること、マニュアルが整備され、履修相談においてより適切に指導がなされるようになってきていることが伺える。ポジティブな回答が6割を超えたということは一定の評価をして良いだろうが、ネガティブな回答は依然として2割以上あり、学生が何を求めているのかを調査し、より多くの学生が満足できるきめの細かい対応を行えるよう努力していきたい。

設問6(GPA)については、「適切である」と「ほぼ適切である」の合計が過去最高の水準になり、GPAによる成績評価はますます受け入れられるようになってきたと言えよう。一方で、「やや不適切である」と「不適切である」の合計は2006年度後期からあまり改善されていない。これは、GPAによる成績評価に対する疑問が依然として残っていることを示している。

以前から強調し続けていることだが、GPAが単なる成績評価システムではなく、成績の自己管理のためのシステムであるという点を学生に理解してもらうことが肝心である。今後とも、個人面談等を通じて、この点を学生に理解してもらえよう努力する必要がある。

また、GPAが学生に受け入れられるには、成績評価方法に対する疑問を無くすことが挙げられるが、一方で、学生が自己管理を行うにあたって、科目毎の成績が一律に能力や学習の成果を適切に反映できているのか、といった疑問があるかも知れない。適切な成績評価が行えるよう、成績評価基準の改善についても引き続き努力していく必要がある。

設問7(受験勉強にかかる時間)からは、受験勉強にかかる時間が2005年度から増加を続けていることが分かる。これは、会計大学院と公認会計士試験制度の制度に対する、学生たちの率直な反応であろう。しかし、会計大学院は会計の専門家として活躍できる人材を育成する場であり、受験勉強の支援をする場ではない。この傾向が一時的なものであるという根拠は見つからず、今後も続くことが予想される。今後

とも、個人面談等を通じて情報を収集し、会計大学院の在り方を探っていきたい。

設問 8(e-mail 等による連絡システム)については、「役に立った」、「まあまあ役に立った」と答えた学生の割合は 2006 年度より減少してはいるものの、全体的な傾向は変わっていないと考えられる。これまでと同様に、e-mail と HP による連絡システムの運用は高く評価されていると考えられる。今後とも、講義に関する連絡事項や資料等に加え、公認会計士試験などに関する情報を随時提示するよう努めたい。

設問 9(在学中の受験)は、2006 年度後期から減少しているものの、今年度も 3 分の 2 と多くの学生が在学中の受験を予定している。在学中から相当な時間を受験勉強に割いている学生が多数存在するようであるが、会計大学院のカリキュラムは在学中の受験を想定して作られてはいない。会計大学院としては、開学以来の目的に沿った教育を目指していくつもりである。

設問 10 (OB 会) は、概ね受け入れられるようである。しかし、「わからない」と回答した学生の多さを考え、修了者および在学生の要望を聞きながら、どのような OB 会が望ましいのか探るべきだろう。

4.「会計大学院の授業に関するアンケート」の集計結果について

4.1. アンケートの実施状況

2007年度後期における開講講義数は46科目（集中講義含む）であり、そのうち履修者が5名以上の講義（28科目）と科目担当教員がアンケートを希望した講義（1科目）についてアンケートが実施された（計29科目）。

授業科目名	履修者数	回収数
財務諸表	61	33
財務諸表分析	40	32
簿記2	31	29
コストマネジメント	16	14
原価計算2	48	35
監査制度	34	28
監査計画の編成法1	23	15
金融論	11	8
企業開示制度の仕組みと実際	35	22
情報システム設計	7	7
上級財務諸表	15	13
上級財務諸表分析	5	5
国際会計基準	45	32
上級コストマネジメント	6	4
上級監査制度	31	30
内部統制の実務	28	20
外書講読（監査）	5	5
外書講読（経営管理）	4	1
情報セキュリティ	33	14
上級証券取引行政	6	6
消費税法	28	19
ビジネス倫理	22	10
会計職業倫理	29	18
事例研究（財務諸表）	8	5
事例研究（管理会計）	7	5
事例研究2（監査制度）	17	17
事例研究（経営管理）	7	1
ビジネス・プレゼンテーション2	7	6
事例研究2（情報システム管理）	8	7
合計	617	441

「履修者数」は履修登録を行った学生数であり、会計大学院以外に在籍する学生も含んでいる。

「回収数」は履修登録を行わず聴講している学生も含んでいる。

表1：アンケート実施科目と回収数

今回のアンケートでは、延べ履修者数617名に対して441名から回答を得た。アンケートの回収率は71.47%であり、前回（2007年度前期）の回収率78.44%と比較すると若干低くなっている。

なお、設問16は既に取得した資格に関するもの、設問17は科目担当教員が独自に行う質問であるので、本報告書においては特に言及しない。また、2007年度前期における同様のアンケート結果については詳細な報告を行っていないので、本報告書においては前期の集計結果にも幾分かコメントを行っている。

4.2. アンケート結果の度数分布と基本統計量

各設問の選択肢に付与された数字は、好ましい回答ほどその値が大きくなるよう設定されている（設問1を除く）ため、この数値化によって回答の平均値、中央値、最頻値の算出を行った。その結果は以下の通りである。

項目\設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
	属性	出席	予習	復習	宿題	理解	難易度	教員準備	プレゼン	教材	評価方法	シラバス	教員評価	対試験	キャリア
5	406	363	11	21	35	87	237	293	259	256	250	165	271	190	248
4	0	39	7	12	27	229	138	79	92	103	129	134	106	110	94
3	15	18	20	42	47	95	54	39	50	51	44	92	41	92	74
2	13	4	47	98	80	26	5	20	26	17	12	31	13	22	11
1	3	12	183	177	128	2	6	6	11	10	3	16	7	22	10
0	0	2	169	88	116	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	437	438	437	438	433	439	440	437	438	437	438	438	438	436	437
平均値	4.81	4.68	0.96	1.49	1.66	3.85	4.35	4.45	4.28	4.32	4.39	3.92	4.42	3.97	4.28
中央値	5.00	5.00	1.00	1.00	1.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	5.00	4.00	5.00
最頻値	5	5	1	1	1	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5

表2：アンケートの基本統計量

所見

設問3～5以外については中央値、最頻値が殆ど5、もしくは4であり、平均値もほぼ全てにおいて4以上を記録している。会計大学院のサービスの質に対する評価としては、概ね良好な回答結果であるように考える。しかし、設問3～5のような学生の勉強時間に関する設問において、大きく下位に偏った分布となっている。これまでと同じ傾向ではあるが、なかなか改善の兆しが見られず憂慮すべき状況である。

4.3. 設問間の相関

各設問間の相関関係を表す相関係数は下表の通りである。

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
	属性	出席	予習	復習	宿題	理解	難易度	教員準備	プレゼン	教材	評価方法	シラバス	教員評価	対試験	キャリア
1 属性	1.00														
2 出席	.09	1.00													
3 予習	-.03	-.07	1.00												
4 復習	.02	.03	.46	1.00											
5 宿題	-.05	-.07	.25	.36	1.00										
6 理解	.00	.17	.12	.08	.06	1.00									
7 難易度	.08	.15	.10	.07	.04	.41	1.00								
8 教員準備	.09	.20	.13	.10	.08	.41	.59	1.00							
9 プレゼン	.00	.14	.12	.00	.09	.43	.48	.67	1.00						
10 教材	-.01	.17	.15	.11	.08	.39	.59	.74	.63	1.00					
11 評価方法	.02	.11	.08	.05	.07	.35	.52	.56	.55	.63	1.00				
12 シラバス	-.08	.13	.13	.13	.11	.33	.39	.45	.45	.53	.51	1.00			
13 教員評価	.06	.17	.19	.12	.08	.42	.65	.77	.73	.75	.65	.58	1.00		
14 対試験	.10	.10	.12	.22	-.04	.30	.45	.42	.26	.38	.33	.44	.47	1.00	
15 キャリア	.21	.14	.16	.13	.03	.34	.53	.50	.45	.49	.42	.39	.61	.46	1.00

表3：質問項目間の相関係数

所見

- 「予習」と「復習」間の相関係数が0.46と比較的高い値になっている。これは、予習を行う学生は復習についても疎かにしていないことを示している。絶対的な勉強時間数は別として、良い傾向である。
- 「復習」と「宿題」間の相関係数が0.36と、若干ではあるが相関を示している。このことから、学生が宿題を行う際に、宿題の内容から派生する関連項目を調べたりすることで講義の復習を充実させていると考えられる。
- 「理解」と「難易度」～「キャリア」間の相関係数が0.3以上となっている。講義内容を理解できたか否かが講義そのものの評価に影響を与えていると言えるかもしれない。つまり、理解できた学生は、担当教員と講義内容の有用性も高く評価する傾向にあるといえる。
- 「難易度」～「キャリア」間は相互に0.4以上という比較的高い相関を示している。これらの項目の多くは担当教員に関するものなので、担当教員に対する評価は「難易度」、「授業準備」、「プレゼン」、「教材」、「評価方法」、「シラバス」、「対試験」、「対キャリア」相互に深く関わっていることがわかる。
- 「教員評価」と「難易度」～「評価方法」間の相関係数が非常に高く、各々0.65～0.77となっている。当然ではあるが、学生が教員に対してこれらの要素を元とした妥当な評価を行っていることが分かる。

4.4. 設問ごとの集計結果と所見

以下では、それぞれの設問について開学当初からの集計結果を示し、2007年度前期、後期の所見と今後の対応について述べる。なお、2007年度後期のアンケート全項目の集計結果については巻末資料4を参照されたい。

質問項目1：該当するものを選んでください（受講者属性）

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
公認会計士コース	69.54%	88.41%	82.11%	92.79%	93.01%	93.55%
高度会計職業人コース	9.20%	4.88%	5.96%	2.40%	0.24%	0.00%
経済経営学専攻	14.94%	3.66%	4.59%	3.61%	1.93%	3.46%
経済学部	6.32%	3.05%	7.34%	1.20%	4.82%	3.00%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	174	164	218	416	415	434

分析と所見

2006年度後期から公認会計士コースの受講者が9割以上を占めており、2007年度についても93%と傾向は変わらず増加している。学部、あるいは経済経営学専攻の学生の受講が、会計大学院開設当初に比べて減少している。したがって、今回（2007年度後期）のアンケートの結果に関しても、大筋で会計大学院の学生からの回答であると判断する。

今後の対応

会計大学院学生以外の受講生が減少しているのは、会計大学院の認知とともに公認会計士へ興味をもつ学生が増え、これまで他専攻から受講していた学生層が会計大学院に入学しているのかもしれない。勿論、そのような明確な根拠がある訳ではないが、そうであることを願って、今後も会計大学院を魅力あるものとする努力を続けてゆくべきであると考えている。

設問2：この講義にどのくらい出席しましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
90% 以上	84.66%	85.28%	91.93%	85.92%	88.78%	83.26%
89-70%	9.66%	7.98%	4.04%	9.55%	7.40%	8.94%
69-50%	3.41%	1.84%	1.79%	1.91%	0.95%	4.13%
49-20%	0.57%	1.84%	0.90%	0.72%	1.43%	0.92%
20%未滿	1.70%	3.07%	1.35%	1.91%	1.43%	2.75%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	176	163	223	419	419	436

分析と所見

これまでと同様に、70%以上出席している学生の割合は9割を超えている。90%以上出席した学生の割合は、初めて85%を割り込んだものの、依然高水準にあると言える。また、これまで同様、前期に比べて後期の出席率が低下するという傾向が見られる。

今後の対応

高い出席率を維持しているのは好ましいことだが、前期と後期で相対的に異なるのは改善する必要がある。第4セメスターの学生にとっては、修了が見え、GPAも特に気にする必要が無くなれば、履修登録はしてみたものの、出席意欲が萎えてくるのかもしれない。また、公認会計士試験を強く意識する時期になり、その対策に時間を割くようになるのかもしれない。いずれにせよ、そのような事由にも劣らない魅力ある講義を心掛け、受講者の出席を促す必要がある。

設問3：この講義の予習にどのくらいの時間をかけましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
5 時間以上	2.86%	2.45%	1.79%	5.46%	1.66%	2.52%
4-5 時間	2.29%	4.29%	1.79%	4.04%	1.19%	1.60%
3-4 時間	7.43%	6.75%	2.69%	6.41%	4.28%	4.58%
2-3 時間	9.71%	12.88%	17.94%	13.78%	14.25%	10.76%
1-2 時間	25.14%	28.22%	22.42%	26.13%	34.44%	41.88%
1 時間未満	52.57%	45.40%	53.36%	44.18%	44.18%	38.67%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	175	163	223	421	421	437

分析と所見

前期と後期で配置されている科目の性格が異なるため、前期と後期で比較をすることは必ずしも適当であるとは考えられず、これまでの前期だけ、あるいは後期だけの推移を見ると、「5 時間以上」、「4-5 時間」、「3-4 時間」は基本的に減少傾向にある。それに対して、「1-2 時間」の増加傾向が顕著である。また、「1 時間未満」については小さいながら減少傾向にある。

今後の対応

この結果から、予習時間が全体として減少していると一概には言えないが、「1-2 時間」に集中している（分散が小さい）のは事実であり、我々が推奨するレベルとは大きく異なるため、予習時間が短いという印象は否めない。本来、会計大学院で提供される講義は、予習を十分に行っていないと理解が難しい充実したものを想定しているが、現実にはそうになっていないのか、あるいは学生の講義に対する「慣れ」のようなものが、年々、定着蔓延しているのかもしれない。受講者の予習時間の充実を図る工夫を、各教員が検討するべきであろう。

設問4：この講義の復習にどのくらいの時間をかけましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
5 時間以上	7.43%	3.70%	2.25%	6.44%	4.75%	4.79%
4-5 時間	4.00%	4.32%	4.95%	4.06%	4.51%	2.74%
3-4 時間	8.00%	9.88%	6.76%	7.64%	7.84%	9.59%
2-3 時間	23.43%	16.67%	20.27%	22.20%	24.23%	22.37%
1-2 時間	37.14%	38.27%	35.59%	36.04%	33.73%	40.41%
1 時間未満	20.00%	27.16%	30.18%	23.63%	24.94%	20.09%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	175	162	222	419	421	438

分析と所見

「4-5 時間」、「5 時間以上」の合計はこれまでと同様 1 割に満たないが、「1 時間未満」の割合が減少し、「1-2 時間」、「2-3 時間」、「3-4 時間」が増加傾向にあり、全体的に底上げがなされる好ましい傾向にある。

今後の対応

復習時間について、徐々に改善されているとは言え、やはり予習時間と同様、あまり満足できる水準ではない。講義では小テストの回数を増やすなど、必然的に復習時間が増えるような環境作りを考える必要がある。

設問5：この講義の宿題にどのくらいの時間をかけましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
5 時間以上	27.17%	13.94%	10.36%	13.14%	8.15%	8.08%
4-5 時間	12.14%	9.70%	7.66%	5.60%	9.35%	6.24%
3-4 時間	13.87%	9.09%	12.16%	10.22%	10.55%	10.85%
2-3 時間	21.39%	21.82%	17.12%	17.27%	19.18%	18.48%
1-2 時間	10.98%	16.97%	31.53%	21.65%	27.58%	29.56%
1 時間未満	14.45%	28.48%	21.17%	32.12%	25.18%	26.79%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	173	165	222	411	417	433

分析と所見

「4-5 時間」、「5 時間以上」は依然減少傾向にあり、本年度は 1 割を割っている。「2-3 時間」、「3-4 時間」は辛うじて今までの水準を維持しているが、「4-5 時間」、「5 時間以上」の減少量がそのまま「1 時間未満」、「1-2 時間」の増加量となっている。

今後の対応

我々教員の課した宿題量が少なすぎるのか、優秀な学生が増えているからなのか判断としない。どちらの理由であるにしろ、学生には更に多くの宿題に取り組む余裕ができていと考えられ、宿題量を含め、これまでの講義内容を見直す必要があるのかもしれない。

設問6：この講義の内容をどの程度理解できたと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
理解できた	16.95%	15.76%	23.66%	21.85%	18.48%	19.82%
ほぼ理解できた	50.85%	50.91%	52.68%	57.48%	50.71%	52.16%
どちらともいえない	17.51%	19.39%	19.20%	16.39%	22.99%	21.64%
あまり理解できなかった	7.34%	8.48%	3.57%	3.56%	6.40%	5.92%
理解できなかった	7.34%	5.45%	0.89%	0.71%	1.42%	0.46%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	177	165	224	421	422	439

分析と所見

「理解できた」、「ほぼ理解できた」は 2006 年度に比べて減少しているが、「あまり理解できなかった」は 2 倍近いポイントになっている。また、「どちらともいえない」が年々増加傾向にあり、本年度に初めて 2 割を超えてしまっている。「どちらともいえない」は、理解できたと言い切れない状況であるため、基本的には理解できていないものと見なせ、あまり良い傾向にあるとは言えない。

今後の対応

このような状況に対する理由は色々と考えられるであろうが、在籍している学生が変われば理解度の分布も変わってくるであろうし、一概に何が原因だとは特定できない。ただ、好ましくない状況を認識しているにも関わらず、放置すべきではないので、何らかの措置を講じていく必要はある。我々教員が、定期試験の点数や成績（GPA）には表れない学生の理解不足をくみ上げ、きめの細かいフォローを心掛けてゆくべきであろう。

設問7：この講義の難易度は会計大学院の講義として適切だと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
適切	40.11%	35.76%	45.29%	50.24%	51.67%	53.86%
ほぼ適切	31.07%	32.12%	38.12%	33.33%	27.27%	31.36%
どちらともいえない	15.25%	16.97%	13.00%	13.81%	17.22%	12.27%
やや不適切	6.78%	8.48%	2.69%	1.43%	3.11%	1.14%
不適切	6.78%	6.67%	0.90%	1.19%	0.72%	1.36%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	177	165	223	420	418	440

分析と所見

「やや不適切」、「不適切」は0%に近い、わずかな数値であり、「どちらともいえない」についても変化は小さく17%、12%であった。「適切」については、後期にこれまでで最高の54%となっており、「ほぼ適切」とあわせて85%、概ね受け入れられていると考えられる。

今後の対応

これまでと同様、「適切」、「ほぼ適切」で8割強を占め、「適切」について最高ポイントを記録したことは好ましい結果であるが、「どちらともいえない」が依然として横這い状態にあるのは看過できない。「どちらともいえない」という回答は、回答者自身が講義内容を理解できていない場合にも選択され得るものであり、前の設問でも同様の回答が22%あったことを考えれば、講義内容に満足できていない学生の数は少なくないと考えられる。後の設問14、15にも関係するが、講義内容の改善に利用するべく、会計大学院の講義に対して学生が求めるもの、学生の声をひろい上げる必要がある。

設問8：教員のこの講義に対する準備は十分でしたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
十分	53.67%	50.30%	63.84%	60.43%	66.67%	67.05%
ほぼ十分	23.16%	29.70%	25.89%	27.01%	21.43%	18.08%
どちらともいえない	11.30%	12.73%	7.59%	7.82%	8.10%	8.92%
やや不十分	6.21%	2.42%	2.23%	3.08%	2.14%	4.58%
不十分	5.65%	4.85%	0.45%	1.66%	1.67%	1.37%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	177	165	224	422	420	437

分析と所見

「十分」が増加傾向にあり、2007年度はこれまでの最高水準67%となった。9割弱の学生が「十分」、「ほぼ十分」と回答している。「どちらともいえない」、「やや不十分」、「不十分」の合計が、やや増加気味なのは注意が必要である。

今後の対応

「どちらともいえない」以下のポイントは、受講者が教員の講義に取り組む姿勢をどのように見ているかを反映したものであるが、この部分が1割強というのは反省すべき点である。仮に担当教員が十分に準備をしたとしても、受講者にそう受け取られないのは、講義方法に問題があるのか、あるいは本当に準備不足であるかであろう。いずれにせよ、講義内容についての理解のし易さ、印象がそうさせるのであって、今後、担当教員はより十分な準備を行って講義に臨み、これらの項目の数値を下げる努力を行うべきであろう。

設問9：教員の説明や声量など、授業でのプレゼンテーションは良かったですか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
良かった	55.68%	42.42%	59.82%	45.73%	60.57%	59.13%
まあまあ良かった	21.59%	28.48%	25.89%	33.41%	19.71%	21.00%
どちらともいえない	9.66%	13.94%	8.48%	12.56%	10.45%	11.42%
やや悪かった	7.39%	5.45%	3.57%	5.45%	5.46%	5.94%
悪かった	5.68%	9.70%	2.23%	2.84%	3.80%	2.51%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	176	165	224	422	421	438

分析と所見

「良かった」について、過去のアンケートでは前期よりも後期の方が低くなることが観測されていたが、本年度はそのような傾向もなく、非常に高い値を記録している。「まあまあ良かった」の大幅な減少分がそのまま「良かった」の増加分に対応しているようだ。「どちらともいえない」以下が特に変化の無いところを考えれば、全体的に見て改善傾向にあり、一定の評価はできる。

今後の対応

「良かった」の値が前期より後期の方が低い傾向にあったのは、前後期の科目配置による影響も考えられる。後期には事例研究が比較的多く配置されており、どうしても受講者の評価が厳しくなり易い状況であるかもしれない。本年度について、その点が改善されたことは評価されるべきであるが、一方で「どちらともいえない」以下の項目がこれまでの水準を維持しているのは非常に残念である。年度、あるいは期毎の教員の転出、転入による影響もあるであろうが、FD（ファカルティ・デベロップメント）などを通じて、会計大学院全教員で常に講義の提供方法について議論を交わし、引き続き改善の努力を行っていきたい。

設問10：テキスト・参考書あるいはプリント等は適切でしたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
適切	46.02%	46.34%	54.71%	48.09%	51.31%	58.58%
ほぼ適切	25.00%	28.66%	30.49%	33.49%	28.50%	23.57%
どちらともいえない	14.77%	13.41%	9.87%	12.44%	14.96%	11.67%
やや不適切	6.25%	4.27%	3.59%	3.59%	3.33%	3.89%
不適切	7.95%	7.32%	1.35%	2.39%	1.90%	2.29%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	176	164	223	418	421	437

分析と所見

「適切」がこれまでで最高の59%であったが、「適切」、「ほぼ適切」の合計や他の数値はこれまでとほとんど変わらない。また、本設問は設問7に大きく関係する内容であるため、やはり回答結果についても設問7とほぼ同等の内容になっている。

今後の対応

一般的に、講義用教材は毎年同じものが使われることが多いが、会計大学院のような専門職大学院の講義では時勢に応じた話題を取り上げる必要があり、それに伴い教材も毎年、每期更新するのが理想的であろうと考えられる。本件についても、FDなどの機会を通じて会計大学院全教員間で意識の共有を図っていきたい。

設問 11：この講義の成績評価の方法は適切だと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
適切	40.11%	35.37%	44.20%	40.57%	56.06%	57.08%
ほぼ適切	26.55%	35.98%	36.16%	34.61%	28.74%	29.45%
どちらともいえない	19.77%	15.24%	16.07%	20.76%	10.69%	10.05%
やや不適切	6.21%	8.54%	1.79%	2.39%	2.38%	2.74%
不適切	7.34%	4.88%	1.79%	1.67%	2.14%	0.68%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	177	164	224	419	421	438

分析と所見

「どちらともいえない」以下が減少傾向にあり、「ほぼ適切」、「適切」の合計が増加している。本年度はこれまでの調査において最も良い結果であると言える。成績評価は客観性、透明（説明）性が重視されるものであり、その点に関して受講者からこのような高評価を受けたことは喜ばしいことである。

今後の対応

本設問の結果は、シラバスに記載している成績評価方法そのものと、実際の評価が公表されている方法通りに行われているかの2点についての判断である。成績評価は学生にとって最大の関心事であり、最重要項目の一つであるため、この点における学生の満足度は当会計大学院の評価に大きく反映されることになる。それゆえ、これまでシラバス作成時や会計大学院運営委員会において、各教員が成績評価方法の公表と正確な履行の重要性について認識する機会を設けた。今回の調査結果は、このような取り組みが奏功した証しであり、今後も引き続きこのような取り組みを行ってゆきたい。

設問 12：この講義のシラバスは講義を理解する上で役に立ちましたか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
役に立った	19.32%	24.24%	33.93%	29.59%	36.58%	37.67%
まあまあ役に立った	27.27%	21.82%	33.48%	34.61%	29.69%	30.59%
どちらともいえない	29.55%	32.12%	24.55%	28.16%	24.94%	21.00%
あまり役に立たなかった	14.20%	11.52%	6.25%	4.53%	5.23%	7.08%
役に立たなかった	9.66%	10.30%	1.79%	3.10%	3.56%	3.65%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	176	165	224	419	421	438

分析と所見

「役に立った」、「まあまあ役に立った」が7割近くに増加しているが、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」が2006年度よりも大きくなっており、全体的に好転しているとは言い切れない。

今後の対応

これまでのシラバスは宿題なども盛り込んでいたため、ボリュームがかなりのものとなっており、正直なところ見辛い部分もあった。2007年度からシラバスの内容を大幅に刷新し、様々な点において改善を図っている。「役に立った」、「まあまあ役に立った」が増えているのは、少なからずその効果が表れているのかもしれない。各学期の個人面談において、「履修計画を立てるときにシラバスを見るが、講義が始まれば殆ど見ることは無い」という意見を学生からよく聞かすが、このように科目選択の参考に使われるだけでなく、講義を理解する際にも参考になるようなシラバスを我々は想定している。そのため2008年度のシラバスではさらに改善を施しているが、今後も常に改善を念頭に置いたシラバス作りを心掛けていきたい。

設問 13：総合的に見て、この講義を担当した教員をどう評価しますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
評価できる	53.67%	44.85%	57.40%	56.97%	64.13%	61.87%
まあまあ評価できる	24.29%	32.12%	29.15%	32.45%	23.28%	24.20%
どちらともいえない	10.17%	10.30%	10.31%	6.01%	7.13%	9.36%
あまり評価できない	5.08%	6.67%	2.24%	3.13%	4.04%	2.97%
評価できない	6.78%	6.06%	0.90%	1.44%	1.43%	1.60%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	177	165	223	416	421	438

分析と所見

「まあまあ評価できる」が減少し、「評価できる」が6割を超え、これら2項目の合計が8割を超えている。非常に良い結果である。

今後の対応

今回の結果は、これまでの傾向を受け、我々教員が高く評価されていることを知ることができる。しかし、この結果に甘んじることなく、「評価できる」を7～8割レベルに引き上げ、「どちらともいえない」を減少させる努力が必要である。会計大学院学生から更に高い評価を得られるよう、FDを活発に行ってゆくべきであると考えます。

設問 14：この講義は公認会計士試験を受験する上で役立つと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
役立つ	30.29%	32.28%	41.18%	41.26%	44.87%	43.58%
まあまあ役に立つ	24.57%	29.11%	34.39%	30.34%	29.59%	25.23%
どちらともいえない	20.00%	20.25%	14.93%	19.66%	18.62%	21.10%
あまり役に立たない	8.57%	10.76%	5.88%	4.61%	4.77%	5.05%
役に立たない	16.57%	7.59%	3.62%	4.13%	2.15%	5.05%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	175	158	221	412	419	436

分析と所見

「役立つ」がこれまでで最も大きい数値となっているが、「どちらともいえない」が2割ほどあり、全体的な傾向はこれまでと変わっていない。「役立つ」、「まあまあ役に立つ」で7割を観測しているのは満足できる水準ではある。

今後の対応

会計大学院は公認会計士試験対策を目的としたものではないが、やはり学生にとっては公認会計士の資格取得は大きな目標の一つであることに間違いは無く、そのサポートを我々会計大学院の教員が行うことは必要であると考えられる。そのためにも、会計大学院の講義が公認会計士試験の問題を解答する上で有益なものとなるよう、各年度の公認会計士試験問題を分析し、講義内容に反映する努力を行うべきであろう。

設問 15：この講義は公認会計士になってからのキャリアに役立つと思いますか。

集計結果

選択項目	2005 前期	2005 後期	2006 前期	2006 後期	2007 前期	2007 後期
役立つ	42.44%	43.40%	49.25%	52.16%	48.67%	56.75%
まあまあ役に立つ	29.07%	28.30%	30.85%	28.75%	28.09%	21.51%
どちらともいえない	19.19%	14.47%	16.42%	15.78%	19.85%	16.93%
あまり役に立たない	2.91%	7.55%	1.00%	2.29%	2.66%	2.52%
役に立たない	6.40%	6.29%	2.49%	1.02%	0.73%	2.29%
計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
総数	172	159	201	393	413	437

分析と所見

「役立つ」が徐々に増加する傾向にあり、「まあまあ役に立つ」と合わせれば8割程度になっている。本会計大学院の教育目的が職業会計人となってから役立つ知識を教えることであるという点に鑑みれば、この傾向は、本会計大学院が教育目的に沿った講義を提供し、それを認知する学生が多くなっていることを示している。

今後の対応

「役立つ」という回答が順調に増加しているが、本会計大学院の教育目的、すなわち、職業会計人（多くは公認会計士）となってから役に立つ知識を教える、を考慮すれば、「役立つ」という回答をさらに伸ばしていく必要がある。また、本会計大学院の講義が役立つものであったかを検証するために、修了生に対する追跡調査も必要となるであろう。今後、修了生のメーリングリストを通じてこのような調査を行っていききたい。

調査開始以来、「どちらともいえない」・「余り役に立たない」・「役に立たない」という回答の割合は減少しているものの20%台で推移している。この点については、講義により実務的な内容を盛り込み、インパクトを高めることで対応していききたい。同時に、修了生に対する追跡調査で、これらの回答の比率がどのようになるかを確認していくことも必要であろう。

4.5. 自己評価と今後の課題

・学生の学習について

設問3～5の集計結果から分かる通り、学生が予習、復習、宿題に掛ける時間の分布は、その中心が非常に少ない方向に偏っており、会計大学院学生は我々の想定を大きく下回る時間でしか会計大学院向けの学習を行っていない。開学当初より、講義に臨む準備や復習は十分に行い、何れの科目においても問題の「奥」にある理論、理屈を理解し、自身の将来に役立つよう吸収することが重要であると指導してきた。そのためには、1時間や2時間程度の学習では不十分であり、現在のような状況では講義による最大限の教育効果が望めない。

Semester開始時の個人面談において、担任教員から各学生に対し学習時間についての注意は行ってきた。特に宿題については、ある程度の時間を掛けなければ理想的な解答ができないよう、各担当教員がボリュームを考えて課しており、必然的に宿題、およびそれに伴う復習が充実するはずである。個人面談での印象として、学生は各科目の単位取得だけを目標にしており、GPAのような「到達度」をあまり気に留めないようである。このような理由から、「宿題は提出しさえすればよい」と考え、その完成度に拘ることが無いため、それほど時間を掛けないのかもしれない。勿論、学生が勉強そのものを怠っているという訳ではなく、公認会計士試験へ向けての勉強にはしっかり取り組んでいるようである。確かに公認会計士試験も、後の自身の進路を左右する重要なものではあるが、自身の職業会計人としての質を高める努力を疎かにしないよう願っている。

これらの点に関して学生に理解してもらえよう、今後も個人面談などを通じて意識改善を促してゆく必要がある。

・教員への評価について

設問6～13については中央値、最頻値がほとんど5であり、平均値もほぼ全てにおいて4以上を記録している。これらの設問は各科目を担当する教員について問うたものであり、ひとまず本会計大学院の在学生からは一定の評価を得られていると判断できる。しかし、設問13では、「評価できる」と回答した学生が6割強ということで、特筆するほどの数値ではない。今回の結果に満足するのではなく、「評価できる」を7～8割、「まあまあ評価できる」と合わせて9割程度を目標とし、全教員一丸となって本会計大学院の教育サービスの向上に努めるべきである。

これまで、本会計大学院ではFDを通じて様々な事例、教授法について教員間で議論を行ってきた。アンケートや学生の声によれば、実務家教員の講義は学生にとって非常に新鮮で印象深く、多くの学生から支持を得ているようである。これらは非常に興味深く、全教員が学び、各々の教授法の参考にすべきことである。したがって、今後もFDなどの活動を活発に行い、講義内容に定評のある教員の取り組みを共有したいと考えている。また、本学だけではなく、他の会計大学院においても教育サービスの改善には注力しており、このような取り組みについて積極的に情報交換を行うことも検討したい。

・講義内容について

設問14,15の回答を見ると、本会計大学院の講義内容が公認会計士試験にも、また後の会計専門家のキャリアにも有益なものと判断されていることが分かる。特に、設問15の回答における「役立つ」、あるいは「まあまあ役に立つ」との合計が、設問14の回答におけるそれらよりも大きな値を示している点である。これは本会計大学院が、会計士試験対策ではなく、高度な知識と分析能力を備えた会計専門家の養成に重きを置いていることを考えれば、ある意味それを反映した結果となっており、我々の講義内容が会計大学

院の設立趣旨に見合ったものであったことを示しているのかもしれない。

しかし、学生にとっては公認会計士の資格を取得することは重要なことであり、その支援が会計大学院で受けられれば、なお一層好ましいことに違いはない。我々教員も、可能な限り会計士試験というものを考慮しつつ講義を行ってきており、今後も同様の対応を続けてゆく。ただ、会計大学院の設立趣旨に賛同し、会計士試験を目標にせず、自身の能力を磨くために入学した学生が存在するのも事実であり、試験対策に偏った講義を行うことにも問題がある。双方の学生の要求を同時に満たすことは難しいが、最大限の配慮を行っていきたい。

いずれにしても、会計士試験、今後のキャリアの何れに有益だったか否かは、修了生に尋ねる方が適切かもしれない。そのような意見を聞くことができれば、会計大学院で受けた教育について、どのようなことが役に立ち、どのようなことが役に立たなかったのかを我々教員が認識でき、今後の教育内容にフィードバックすることが可能になる。修了生に対するアンケート、追跡調査には検討する価値があると思われる。

5. 自由記入欄の意見について

「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」、および「会計大学院の授業に関するアンケート」に設けられた自由記入欄について、授業に関するものは科目担当教員による回答が必要であり、ここでは特にコメントしないが、寄せられた意見は確実に担当教員へ報告している。ここでは、カリキュラム等に関するものに対してのみ言及する。

今回のアンケートでも、学生諸君から様々な要望を受けているが、その中でも以下の2点に関する要望が多かったので、ここでコメントしたい。

- ① 会社法関連科目の充実
- ② 計算科目の充実（簿記・管理会計等）

①については、現在「会社法（2単位）」が開講されているだけであり、会計大学院としても会社法関連の講義が少ないことは認識している。また、民法・商法関連科目の開講を望む声もあった。予算・人的資源の制約もあり新規開講の時期に関して約束はできないが、会社法に関する新たな科目を開講する方向で現在努力していることを報告しておく。

②については、公認会計士試験において簿記等の計算能力を必要とする科目の充実を望むことと考えられるが、会計大学院の教育目的に鑑みて、受験テクニックの修得のみを目的とする科目を新たに開講することは考えていない。しかし、学生諸君にとって公認会計士試験に合格することは重要な意味をもつことは理解できる。これらの点を考慮し、該当科目を担当する教員で講義の方法について検討していきたいと考えている。

ここでは、アンケートに書かれたすべての意見を取り上げることはできなかったが、多くの学生が望むことについては今後とも積極的に取り上げ、改善していきたいと考えている。今後行われるアンケートにおいても、会計大学院に対する要望・希望等を積極的に行って頂くことを切望する。

巻末資料

資料1：2007年度「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」設問用紙

資料2：2007年度後期「会計大学院の授業に関するアンケート」設問用紙

資料3：2007年度「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」集計結果

資料4：2007年度後期「会計大学院の授業に関するアンケート」集計結果

資料1：2007年度「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」設問用紙

会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート（2007年度後期）

このアンケートは、学生諸君の意見を会計大学院のカリキュラム改善に役立てることを目的として行うものであり、集計結果等は報告書として公表致します。

回答者属性

番号	質問	回答
1	あなたの専攻・コースについて、該当するものを選んで下さい。	(5) 公認会計士コース (3) 経済経営学専攻 (4) 高度会計職業人コース (2) 経済学部

カリキュラムについて

番号	質問	回答
2	基礎、展開、実践・応用科目（注）の配置は適切だと思いますか？	(5) 適切である (2) やや不適切である (4) ほぼ適切である (1) 不適切である (3) どちらともいえない
3	セメスター間の開設授業科目のバランスは適切だと思いますか？	(5) 適切である (2) やや不適切である (4) ほぼ適切である (1) 不適切である (3) どちらともいえない
4	オフィスパワーを利用して教員に履修相談・質問等を行った回数についてお答えください。	(5) 5回以上 (2) 1回 (4) 4回または3回 (1) 利用しなかった (3) 2回
5	セメスター開始時に行われる履修指導は、学習計画を立てる上で役に立ちましたか？	(5) 役に立った (2) あまり役に立たなかった (4) まあまあ役に立った (1) 役に立たなかった (3) どちらともいえない
6	本大学院で成績評価に用いている GPA は、学生個々の能力を適切に評価できると思いますか？	(5) 適切である (2) やや不適切である (4) ほぼ適切である (1) 不適切である (3) どちらともいえない
7	講義の予習・復習・宿題以外に、公認会計士試験のための自主学習には1日平均何時間くらい時間を掛けていますか？	(5) 5時間以上 (2) 1-3時間 (4) 4-5時間 (1) していない (3) 3-4時間
8	本大学院では、学生への連絡・掲示媒体として e-mail, HP を用いていますが、このシステムは役に立ちましたか？	(5) 役に立った (2) あまり役に立たなかった (4) まあまあ役に立った (1) 役に立たなかった (3) どちらともいえない
9	在学中に公認会計士試験を受験しようと考えていますか？	(5) 考えている (4) まだ決めていない (3) 考えていない
10	会計大学院 OB 会を組織したいと考えています。OB 会創設に関してご意見をお聞かせ下さい。	(5) 賛成 (4) 反対 (3) 分からない <特にご意見のある方は、自由記入欄へご記入下さい。>
11	今後、新たに開設すべき科目がありますか？	自由記入欄に3つ以内で回答して下さい。

(注) 科目分類については裏面を参照して下さい。

基礎科目：各科目領域（会計・経済と経営・ITと統計・法と倫理）を学ぶ上で基礎となる内容を学習する。

展開科目：基礎科目の理解を前提とし、より高度な内容を学習する。

実践・応用科目：基礎、展開科目で学んだ内容が、実際にどのように応用されていくのかを学習する。

アンケートは以上です。御協力感謝致します。

資料2：2007年度後期「会計大学院の授業に関するアンケート」設問用紙

会計大学院の授業に関するアンケート（2007年度後期）

このアンケートは会計大学院の授業改善に学生諸君の意見を反映するためのものであり、集計結果等は報告書として公表致します。

授業科目名はマークシート用紙に記入されていますので御確認下さい。

回答者属性

番号	質問	回答	備考
1	あなたの専攻・コースについて、該当するものを選んで下さい。	(5) 公認会計士コース (4) 高度会計職業人コース (3) 経済経営学専攻 (2) 経済学部	

科目内容について

番号	質問	回答	備考
2	この講義にどのくらい出席しましたか？	(5)90% 以上 (4)89-70% (3)69-50% (2)49-20% (1)20% 未満	おおよその出席率で回答して下さい。
3	この講義の予習にどのくらいの時間を掛けましたか？	(5)5 時間以上 (4)4-5 時間 (3)3-4 時間 (2)2-3 時間 (1)1-2 時間 (0)1 時間未満	セメスターを通じた平均時間を回答して下さい。
4	この講義の復習にどのくらいの時間を掛けましたか？	(5)5 時間以上 (4)4-5 時間 (3)3-4 時間 (2)2-3 時間 (1)1-2 時間 (0)1 時間未満	宿題に掛けた時間を含めずに回答して下さい。
5	この講義の宿題にどのくらいの時間を掛けましたか？	(5)5 時間以上 (4)4-5 時間 (3)3-4 時間 (2)2-3 時間 (1)1-2 時間 (0)1 時間未満	セメスターを通じた平均時間を回答して下さい。
6	この講義の内容をどの程度理解できたと思いますか？	(5) 理解できた (4) ほぼ理解できた (3) どちらともいえない (2) あまり理解できなかった (1) 理解できなかった	
7	この講義の難易度は会計大学院の講義として適切だと思いますか？	(5) 適切である (4) ほぼ適切である (3) どちらともいえない (2) やや不適切である (1) 不適切である	この講義が基礎、展開、実践・応用科目（注）の何れに属しているか（マークシートに記載）を考慮して回答して下さい。

番号	質問	回答	備考
8	教員のこの講義に対する準備は十分でしたか？	(5) 十分だった (4) ほぼ十分だった (3) どちらともいえない (2) やや不十分だった (1) 不十分だった	
9	教員の説明や声量など、授業でのプレゼンテーションは良好でしたか？	(5) 十分だった (4) ほぼ十分だった (3) どちらともいえない (2) やや不十分だった (1) 不十分だった	板書・プロジェクター等の利用も考慮して回答して下さい。
10	テキスト・参考書あるいはプリント等は適切でしたか？	(5) 適切である (4) ほぼ適切である (3) どちらともいえない (2) やや不適切である (1) 不適切である	
11	この講義の成績評価の方法は適切であると思いますか？	(5) 適切である (4) ほぼ適切である (3) どちらともいえない (2) やや不適切である (1) 不適切である	シラバスに記載されている成績評価を考慮して回答して下さい。
12	この講義のシラバスは講義を理解する上で役に立ちましたか？	(5) 役に立った (4) まあまあ役に立った (3) どちらともいえない (2) あまり役に立たなかった (1) 役に立たなかった	講義を選択する際に役立ったかという点も考慮して回答して下さい。
13	総合的に見て、この講義を担当した教員をどう評価しますか？	(5) 評価できる (4) まあまあ評価できる (3) どちらともいえない (2) あまり評価できない (1) 評価できない	
14	この講義は、公認会計士試験を受験する上で役立つと思いますか？	(5) 役立つ (4) まあまあ役に立つ (3) どちらともいえない (2) あまり役に立たない (1) 役に立たない	
15	この講義は、公認会計士になってからのキャリアにおいて役立つと思いますか？	(5) 役立つ (4) まあまあ役に立つ (3) どちらともいえない (2) あまり役に立たない (1) 役に立たない	
16	あなたが既に合格している資格試験等について、該当するものを選んで下さい。	(5) 税理士会計科目 (4) 公認会計士短答式 (3) 日商簿記1級 (2) 日商簿記2級 (1) その他	複数回答可能です。
17	《講義担当教員による質問》	(5), (4), (3), (2), (1)	担当教員による質問があれば回答して下さい。
18	《自由記入欄》	授業の感想、担当教員への要望、また本アンケートの各質問に関連した更なる意見等を、マークシート添付の用紙に自由に記入して下さい。	

アンケートは以上です。御協力感謝致します。

資料3：2007年度「会計大学院のカリキュラム等に関するアンケート」集計結果

	選択項目	人数	割合
設問1 回答者属性	公認会計士コース	56	93.33%
	高度会計職業人コース	1	1.67%
	経済経営学専攻	3	5.00%
	経済学部	0	0.00%
	合計	60	100.00%
設問2 基礎、展開、実践・応用の 科目配置は適切だと思いま すか。	適切である	20	32.79%
	ほぼ適切である	21	34.43%
	どちらともいえない	9	14.75%
	やや不適切である	7	11.48%
	不適切である	4	6.56%
	合計	61	100.00%
設問3 Semester間の開設授業科 目のバランスは適切だと思 いますか。	適切である	10	16.67%
	ほぼ適切である	15	25.00%
	どちらともいえない	16	26.67%
	やや不適切である	11	18.33%
	不適切である	8	13.33%
	合計	60	100.00%
設問4 オフィスアワーを利用して 教員に履修相談・質問等 を行った回数は。	5回以上	6	9.84%
	4回または3回	8	13.11%
	2回	16	26.23%
	1回	10	16.39%
	利用しなかった	21	34.43%
	合計	61	100.00%
設問5 Semester開始時の履修指 導は、学習計画を立てる上 で役に立ちましたか。	役に立った	23	38.33%
	まあまあ役に立った	14	23.33%
	どちらともいえない	9	15.00%
	あまり役に立たなかった	6	10.00%
	役に立たなかった	8	13.33%
	合計	60	100.00%
設問6 GPAによって学生の能力 は適切に評価できると思 いますか。	適切である	11	18.03%
	ほぼ適切である	15	24.59%
	どちらともいえない	18	29.51%
	やや不適切である	10	16.39%
	不適切である	7	11.48%
合計	61	100.00%	
設問7 受験のための自主学習には 1日平均何時間くらいかけ ていますか。	5時間以上	21	35.00%
	4-5時間	12	20.00%
	3-4時間	10	16.67%
	1-3時間	9	15.00%
	していない	8	13.33%
	合計	60	100.00%
設問8 e-mail, HPを用いた連絡シ ステムは役に立ちました か。	役に立った	34	56.67%
	まあまあ役に立った	14	23.33%
	どちらともいえない	9	15.00%
	あまり役に立たなかった	1	1.67%
	役に立たなかった	2	3.33%
	合計	60	100.00%
設問9 在学中の受験を考えていま すか。	考えている	39	67.24%
	まだ決めていない	4	6.90%
	考えていない	15	25.86%
	合計	58	100.00%
設問10 OB会について	賛成	30	51.72%
	反対	4	6.90%
	分からない	24	41.38%
	合計	58	100.00%

注) 設問の文言は本来のものと若干異なります。

資料4：2007年度後期「会計大学院の授業に関するアンケート」集計結果

	選択項目	人数	割合
設問1 回答者属性	公認会計士コース	406	93.55%
	高度会計職業人コース	0	0.00%
	経済経営学専攻	15	3.46%
	経済学部	13	3.00%
	合計	434	100.00%
設問2 この講義にどのくらい出席しましたか。	90%以上	363	83.26%
	89-70%	39	8.94%
	69-50%	18	4.13%
	49-20%	4	0.92%
	20%未満	12	2.75%
合計	436	100.00%	
設問3 この講義の予習にどのくらいの時間をかけましたか。	5時間以上	11	2.52%
	4-5時間	7	1.60%
	3-4時間	20	4.58%
	2-3時間	47	10.76%
	1-2時間	183	41.88%
	1時間未満	169	38.67%
合計	437	100.00%	
設問4 この講義の復習にどのくらいの時間をかけましたか。	5時間以上	21	4.79%
	4-5時間	12	2.74%
	3-4時間	42	9.59%
	2-3時間	98	22.37%
	1-2時間	177	40.41%
	1時間未満	88	20.09%
合計	438	100.00%	
設問5 この講義の宿題にどのくらいの時間をかけましたか。	5時間以上	35	8.08%
	4-5時間	27	6.24%
	3-4時間	47	10.85%
	2-3時間	80	18.48%
	1-2時間	128	29.56%
	1時間未満	116	26.79%
合計	433	100.00%	
設問6 この講義の内容をどの程度理解できたと思いますか。	理解できた	87	19.82%
	ほぼ理解できた	229	52.16%
	どちらともいえない	95	21.64%
	あまり理解できなかった	26	5.92%
	理解できなかった	2	0.46%
合計	439	100.00%	
設問7 この講義のレベルは会計大学院の講義として適切だと思いますか。	適切	237	53.86%
	ほぼ適切	138	31.36%
	どちらともいえない	54	12.27%
	やや不適切	5	1.14%
	不適切	6	1.36%
合計	440	100.00%	
設問8 教員のこの講義に対する準備は十分でしたか。	十分	293	67.05%
	ほぼ十分	79	18.08%
	どちらともいえない	39	8.92%
	やや不十分	20	4.58%
	不十分	6	1.37%
合計	437	100.00%	

	選択項目	人数	割合
設問9 教員の説明や声など、授業でのプレゼンテーションは良かったですか。	十分	259	59.13%
	ほぼ十分	92	21.00%
	どちらともいえない	50	11.42%
	やや不十分	26	5.94%
	不十分	11	2.51%
合計	438	100.00%	
設問10 テキスト・参考書あるいはプリント等は適切でしたか。	適切	256	58.58%
	ほぼ適切	103	23.57%
	どちらともいえない	51	11.67%
	やや不適切	17	3.89%
不適切	10	2.29%	
合計	437	100.00%	
設問11 この講義の成績評価の方法は適切だと思いますか。	適切	250	57.08%
	ほぼ適切	129	29.45%
	どちらともいえない	44	10.05%
	やや不適切	12	2.74%
不適切	3	0.68%	
合計	438	100.00%	
設問12 この講義のシラバスは講義を理解する上で役に立ちましたか。	役に立った	165	37.67%
	まあまあ役に立った	134	30.59%
	どちらともいえない	92	21.00%
	あまり役に立たなかった	31	7.08%
	役に立たなかった	16	3.65%
合計	438	100.00%	
設問13 総合的に見て、この講義を担当した教員をどう評価しますか。	評価できる	271	61.87%
	まあまあ評価できる	106	24.20%
	どちらともいえない	41	9.36%
	あまり評価できない	13	2.97%
評価できない	7	1.60%	
合計	438	100.00%	
設問14 この講義は公認会計士試験を受験する上で役に立つと思いますか。	役立つ	190	43.58%
	まあまあ役に立つ	110	25.23%
	どちらともいえない	92	21.10%
	あまり役に立たない	22	5.05%
役に立たない	22	5.05%	
合計	436	100.00%	
設問15 この講義は公認会計士になってからのキャリアに役立つと思いますか。	役立つ	248	56.75%
	まあまあ役に立つ	94	21.51%
	どちらともいえない	74	16.93%
	あまり役に立たない	11	2.52%
役に立たない	10	2.29%	
合計	437	100.00%	
設問16 既に合格した資格試験等について教えてください。	税理士会計科目	5	1.40%
	公認会計士短答式	37	10.34%
	日商簿記1級	48	13.41%
	日商簿記2級	224	62.57%
	日商簿記3級	44	12.29%
合計	358	100.00%	

注) 設問の文言は本来のものと若干異なります。

2007 年度 東北大学会計大学院ワークショップ委員会

委員長	伊藤 健
委員	青木 雅明
委員	榎本 正博
委員	松田 康弘
委員	安田 一彦

会計大学院アンケート実施報告書 2007 年度後期

2008 年 6 月 12 日発行

編集・発行： 東北大学会計大学院ワークショップ委員会